

結

森は今日も穏やかです。
あの疑いあいの席は、なにかの悪い冗談だった気さえします。

「……ねえ、リタ」
「どうしたの？ ラウル」

木の実の採集に行っていた新顔／ラウルは、
珍しく「ただいま」と言うのを忘れていたようでした。
魔女／リタが先を促すと、玄関口でそのまま言葉を続けます。

「あいつ、森の外に行くみたい。きっとまた、人を殺すよ」
魔女／リタは小さく目を見張り、そして静かに問いかけました。
「それなら、ラウルはどうしたい？」

新顔／ラウルは、まっすぐに魔女／リタへこたえました。

「止めてくる。そっちに行くのはだめだって」

「そうだね。じゃあ走って追いかけてようか」
魔女／リタが言うと、新顔／ラウルはうなずきました。
いつかの怯えも踏み越えて、新顔／ラウルは駆けだします。

「リタは待ってて。ちゃんところに、戻ってくるから！」

+++++

END-LR-1s：『もうひとつを取りこぼさないために』